

「ナナメの関係」再考：貧困家庭の子どもを支援するNPOの聞きとりから

¹宗形義貴 ²神谷純子

¹足立区立皿沼小学校

²帝京科学大学

Examination of Diagonal Dyadic 'Naname' Relationships
: From Interviews with NPOs that Support Children from Poor Families

¹Yoshiki MUNAKATA ²Sumiko KAMITANI

¹Saranuma Elementary School

²Teikyo University of Science

キーワード：子どもの貧困、社会関係資本、居場所、委託事業、地域連携

1. はじめに

足立区は平成27年度を「子どもの貧困対策元年」と位置づけ、他の自治体に先んじて貧困対策に着手した。翌年8月、認定NPO法人カタリバ（以下、カタリバ）、及びNPO法人キッズドア（以下、キッズドア）が区の「居場所を兼ねた学習支援事業」を受託し、各々区内2カ所に施設を開設して活動を始めた。

カタリバの施設「アダチベース」の運営において重視されているのは、子どもとの「ナナメの関係」*¹の構築である。文部科学省中央教育審議会の特別部会委員を務めた藤原和博¹⁾によれば、ナナメの関係とは「親でも教師でもない第三者と子どもとの新しい関係」²⁾であり、カタリバではこの関係性について、次のように述べている（図1）。

10代は、多くの時間を「タテの関係（親や先生など）」と「ヨコの関係（同世代の友人）」の人たちと過ごします。しかし思春期はタテの関係には心を閉ざしやすく、ヨコの関係には同調圧力で悩みやすいという世代特性があります。本当は、それらとは違った角度から本音で対話できる、利害関係のない“一歩先をゆく先輩”との「ナナメの関係」が必要です。³⁾

ナナメの関係という共成長モデルはカタリバのすべての活動の軸であり、アダチベースにおいても、ナナメの関係と対話をベースとしたコミュニケー

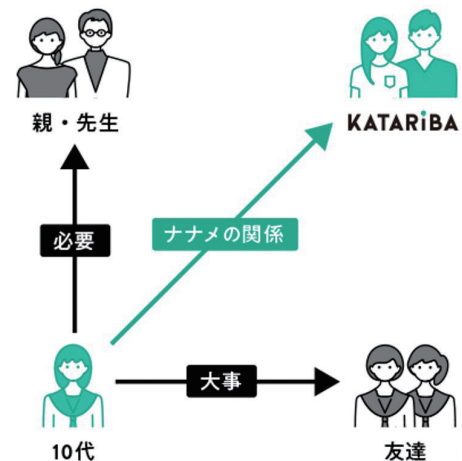


図1 ナナメの関係という共成長モデル
出典：認定NPO法人カタリバ ホームページ

ションによって、子どもたちの心の基盤となる安全基地*²をつくらうとしている。

本稿では、足立区の事業を受託しているカタリバ、及びキッズドアの2つのNPOにおける聞きとりからナナメの関係を再考する。

2. 聞きとりの記録から*³

2.1 カタリバ（アダチベース）

2021年11月半ば、NPO法人カタリバが足立区内二か所で展開する施設「アダチベース」のひとつを訪問した。当日は、足立区くらしとしごとの相談センターの職員、及びカタリバの職員でありアダチベーススタッフのAさんにご対応いただいた。施設

の各部屋を見学し説明を受けた後、三階の学習スペースでAさんに話を伺った。以下は、その要約である。

(1) 角度の使い分け

職員は常にナナメ45度から接しているわけではなく、状況に応じて意図的に接し方の角度を変化させ、使い分けている。普段は教師や保護者のように上からではなく、水平寄りの角度から「良きお兄さん・お姉さん」としてかかわることを心がけており、砕けた口調で子どもに語りかけ、子どもも職員をニックネームで呼ぶ。一方、こうしたかかわり方のために、職員と子どもとの境界が曖昧になってしまうことがある。そのため、約束事を守れないときなど子どもを強く指導する必要があるときには、直角に近い角度でかかわる。叱るというより諭すイメージで、他人とのかかわり方や社会で通用する礼儀やマナーを教える。例えば施設には、「他人には敬意をはらうこと」など5項目が最低限守るべき約束事として決められている。また、宿題に取り組んで来なかったときに子ども自身にその理由を説明させたり、約束事を破ったときには謝るようにうながしたりする。

学習面の指導にも力を入れており、研修を受けた職員、インターン生やボランティアが担う。学習もコミュニケーションのひとつと考えて、子どもとの対話が大切にされ、職員は、対話を通じて子どもが意欲を持つように方向づけていく。学習とは、他人との比較がなければ誰でも結果を出すことができ、自分が出した成果を実感できるツールであり、また、学ぶ力を伸ばし自己肯定感を育むことで、施設に居場所としての安心感を作ることができると考えている。

施設には、進路や進学に不安のある生徒が多数いる。進路の話をするときには、具体的な職業や進学先ではなく、「どういう人生を送りたいのか」を聞く。自分らしく生きるためには何をすればいいのか、興味を惹かれるものは何かなどを対話しながら探していく。

施設では、かかわりの成果を分析するために、独自の評価軸を設けて子どもの学びの質や気持ちの変化を視覚化している。指標とする評価軸には、子どもに社会性が育まれていること、自ら学びに向かっていること、進路を決定する指標を持っていることなどがあり、子どもの観察により施設におけるかかわり方を評価している。

(2) 多様な大人の存在

施設には多くの職員がいて、子どもがかかわる大人を意図的に変えられるという利点がある。例えば、ひとり親家庭の場合、子どもがかかわることができる大人は親に限定され、親との関係に問題が生じると子どもをケアする大人がいなくなる。しかし、施設では、ある職員に指導されたときはほかの職員と話し合うことができ、子どもに気持ちの余裕が生まれ、考えを整理することができるようになる。また、職員どうし情報の共有を行いながら子どもと接することで、子どもは、多様な大人の考え方や価値観に触れながら、人とかかわり方や気持ちの切り替え方を学ぶことができる。

将来に不安のある子どもが多く、「仕事が辛いね」「今日も疲れたな」などの職員間の会話も子どもの不安を増大させる恐れがある。施設では、大人が多い環境であることの利点を生かすため、職員間の言動を意識的にコントロールし、働くことへの不安を募らせないように気をつけている。また、施設に来る子どもたちは勉強やスポーツなどにおける成功体験が少なく、概して自己肯定感が低い。そのため職員は、どんな些細なことでもほめるように意識している。指導するときはほかの子どもが見ていることを前提とした話し方や指導の仕方を心がけ、ほめるときにもほかの子どもの見本となるように見えるところでほめる。こうして多くの人がいることを意図的に活用している。

子どもを理解し、職員の指導に齟齬が生じないようにするために、職員どうしのこまめな情報共有を大切にしている。終業後は職員間でミーティングを行い、学習面だけではなく、成長が感じられる子どもの姿を共有し称賛することが多い。どんな子どもにもほめるポイントがあり、それを共有することで職員のほめる行為が促進される。良いところに目を向け、子どもに良い行動をうながし、そうではない部分や行動が自然に減少するようなかかわりを意識している。施設ではほめられることが多いため、子どもにとってフラストレーションが少ない環境づくりができていると思われる。職員には子どもの好ましくない部分が見えることも多くあるが、良い部分に焦点を当てることにより、ミーティングの雰囲気を見好ましいものにし、職員にも楽しい職場環境をつくらうと心がけている。

学校との連携も行っている。基本的にこの施設は学校を補完する役割を担うと考え、面談の内容は教師と共有し、話の内容を子どもが誤ってとらえてい

ないか確認している。学校での学習、生活そして進路の指導が円滑に進むように支援し、子どもが自分で判断、選択し決定する力を育てている。

2.2 キッズドア

2021年11月半ば、NPO法人キッズドアが足立区内二か所で展開する施設のひとつを訪問した。当日は、足立区くらしとしごとの相談センターの職員お二人、及びキッズドア施設長のBさんにご対応いただいた。施設内を見学し説明を受けた後、子どもたちがいるフロアの一部をパーテーションで区切った場所でBさんにお話を伺った。以下は、その要約である。

(1) サポートに徹する

職員や、子どもに直接対応する大学生のスタッフには、態度や言葉遣いに注意を払い、上からものを言わないように、また、子どもの話を聞いて受け入れてほしいと伝えている。子どもが施設に来ないと職員には何の手助けもできないため、施設が安全な場所であり、大人が子どもに危害を及ぼすことはない子どもに伝わり、子どもが施設の大人を信用し、通い続けられるように心がけている。保護者と子どもの意見が対立し板挟みになってしまうときには、役割を分け、施設は子どもの味方、学校は保護者の味方になり保護者の話を聞いてもらう。施設では、子どもがどう感じているのかを大切に話を聞く。施設での生活は学校とは異なり、スタッフは先生ではなく、お兄さんお姉さん、仲のよい大人であるという雰囲気がある。子どもたちはスタッフとニックネームで呼びあい、砕けた口調で話す。

保護者の要望もある程度は聞くが、聞き入れすぎると子どもが「結局、自分のことを考えてくれない」「親の言うことを聞く人たちなんだ」と思い、職員を信用しなくなる。施設はあくまでも子どもの味方として、子どもの思いやものの見方を大事にしている。子どものほうが間違っている場合は、子どもの目を通すとどう見えるのか、なぜ親の言うことを嫌だ、違うと感じてしまうのかを子どもと一緒に考える。こうした段階を踏まずに、一般論で指導するだけでは子どもに響かない。例えば、高校進学に関しては、一般論から考えても進学するメリットは多い。しかし、これをそのまま子どもに伝えても意味がない。進学を希望しない場合はその理由や中学卒業後の進路について話し合い、子どもが決める手伝いをする。施設では、子どもに「こうしなさい、あしなさい」

と答えを提示するのではなく、子どもの選択をサポートする役割に徹する。子どもが選択して決定するのを道添〔ママ〕するイメージであるとスタッフには伝えるが、社会の一般的なルールをたどってきた人が多く、悪気がなくても自分の正解を言ってしまうがちである。進学については、「大学は出ておいたほうがいい」「高校は全日制のほうが普通」など、自分が歩んできた道や、世間的な「普通」のイメージを伝えてしまうことがよくある。進路を選ぶのは子どもである。選択肢を提示しても良いが、大人の視点を押しつけてはならない。

(2) 幅広いキャリア支援

集団での学習は難しく、個別に支援している。以前は、学年や単元から支援する内容を判断したり、つまづきがある学年まで遡ったりするなど、学習塾に近い支援をしていた。しかし、大人がやったほうがよいと考えるものと、子どもが学習したいものは違う。大人が考える学習は理にかなっていることが多いが、子どもの気持ちに勝るものはなく、気持ちに乗っていない状態での学習は身につかないことが多い。やらされている感覚が抜けず、量をこなしても、よい教材や指導方法でも、子どもの成長にはつながりにくい。そのため、今年（筆者注：2021年度）から、定期テストの期間を考慮しながら時期を区分し、何をどの程度学習するか、子どもがスタッフと相談して決めるように変更した。中には苦手科目の学習を避ける子どももいる。苦手科目のために進級や受験に支障が出るとスタッフが感じるときは、スタッフから勉強したほうがよい理由を説明し、子どもが納得したら計画に取り入れる。子どもの「納得感」を大切にしながら学習支援を行っており、自分で決めたことがどれだけできるようになったかをも確認することが重要であると考えている。

受験生は、現段階の学力で進学できる高校のレベルが制限されるなど、自分の実力と向き合うことが多い。気持ちの整理を手伝い、進路選択に際して投げやりにならないようにかかわる。また、入学後にやる気を持続させ、納得して高校生活を送るために、その高校を選択した理由をたずね、進学した目的を忘れないようにかかわっている。進学先を決めた理由を子どもが納得していることが大切と考えているが、進路選択の理由を明確に話せる子どもは多くない。進路の選択肢が少なく、仕方なく進学したという子どもも少なからずいる。丁寧に判断し、自分に合った学校選びができるように、同じレベルの

高校でも、単位制と普通科の違いや、普通科でもカリキュラムが異なるなど相違点を探したり、自分の将来を想像してどの高校が適しているのかを考えたりする手伝いをする。将来就きたい職業があっても、その過程がどうなっているのかを知らないことが多い。施設では、希望する職業に就くためのルートと一緒に調べる。学校などでは自分で調べさせることでも、施設に来る子どもは、調べ方がわからず諦めてしまうことがよくある。そうならないように手伝う。

進路の希望は、子どもが話そうとするときに聞く。スタッフの記録や雑談などから子どもの興味関心をとらえ、こちらから水を向けることもある。イベントなどをきっかけとして進路の話になることもよくあり、そうした機会を逃さずに聞き出す。また、ロールモデルの不足を補い進路の選択肢を増やすために、こうした日々の支援に加えて、様々な企業の見学や職場体験、ゲストスピーカーを招いて話を聞くなど、キャリア支援の活動にも力を入れている。

3. 考察

3.1 タテ寄りのナナメの関係（アダチベース）のかかわり

アダチベースでは意識的にナナメの角度を使い分けている。子どもは職員をニックネームで呼び、砕けた口調で話す水平（ヨコ）寄りの関係をベースとしながら、けじめが必要なときなど強い指導力が求められる場面では、直角（タテ）寄りの位置からかかわっている。また、学ぶ力の育成を基盤とする学習を重視し、職員には学習指導の方針や研修が行われ、子どもにも学習の重要性を意識づけようとしている。

職員・スタッフが強い指導力を発揮しようとするとき、かかわりの角度は45度よりも大きくタテ寄りのナナメになり、これをイメージで表すと縦長の円錐形^{*4}になる（図2）。親や教師など子どもに対してタテに位置する大人は、社会の主流となる価値観・中心的な規範に即して指導的に子どもにかかわる。ゆえに学習に重点を置いた子どもとのかかわりは、指導性の強いタテ寄りになりやすく、子どもの選択肢（底面積）は狭まり、進路は進学に限定されていく。一方、子どもに対してナナメの関係にあることを標榜するアダチベースでは、学習に重心を置きつつも、子どもの興味関心を基盤とした学ぶ力の育成により、子どもが自ら進路を切り拓くことをめざしている。また、アダチベースにおいては、タテ

寄りの関係に伴う価値観や規範の狭さを多様な大人の存在によって補っていると考えられる。

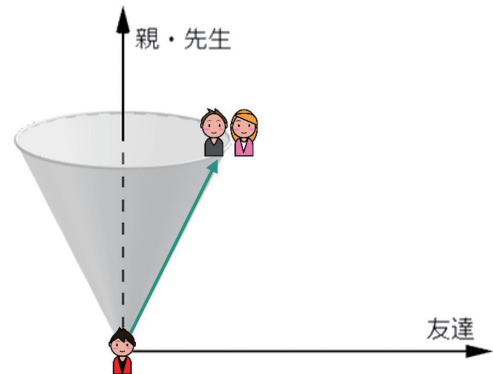


図2 タテ寄りのナナメの関係（アダチベース）

3.2 ヨコ寄りのナナメ——キッズドアのかかわり

キッズドアでは子どもの主体性を重視し、ヨコ寄りにナナメの関係を築こうとしている。そのために、保護者の意見を意図的に遮断し、家庭や学校と一定の距離を置いて、子どもにタテの関係性を感じさせない居場所づくりをめざしている。スタッフは指導的な役割から離れて子どもの主体的な選択を「手伝う」ことに徹し、子ども自身の「納得感」を確かめながらかかわる。キッズドアにおける関係性の特徴は、スタッフが子ども自身の言動をともに分析し自己理解を進める支援の手法や、豊かな選択肢を提供して子どもの自己決定を待つというキャリア教育のあり方に見られる。

限りなくヨコ寄りの関係を築きながら子どもの自己決定を支えるキッズドアのナナメの関係においては、大人の指導力は意図的に弱められ、かかわりの角度は45度よりも小さくなる。これをイメージで表すと横長の円錐形になる（図3）。子どもの学力を伸ばし進学に向かわせる指導力は弱まるが、子どもの進路にかかわる選択肢（底面積）は広がる。子

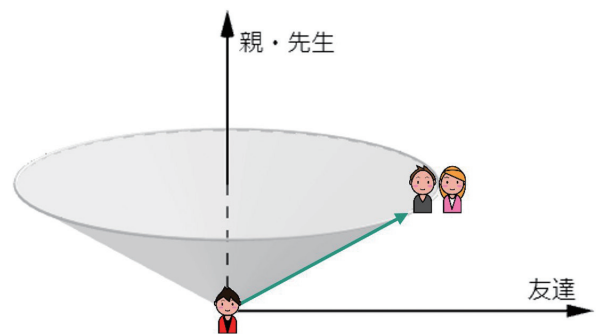


図3 ヨコ寄りのナナメの関係（キッズドア）

どもの主体性を重視し、自己決定を基本としながらも子どもに伴走し支える姿勢は、ナナメの関係にある大人の基本的な立ち位置と言える。

4. まとめに代えて——教育現場への示唆

本稿の目的は、カタリバ、及びキッズドアの2つのNPOにおける聞きとりからナナメの関係を再考することであった。各々のNPOのかかわり方には相違点があり、アダチベースではタテ寄り、キッズドアではヨコ寄りの関係を活用していた。このことからナナメの関係にも角度にバラエティがあることがわかった。一般に「少し年上のお兄さんお姉さん」は子どもに対してナナメの関係にあるとされることが多いが、本稿の考察からは、年齢差は絶対条件ではなく、子どもに対して指導力を発揮できる他者が、どの程度の指導力を行使して子どもと向き合うかがかかわりの角度を決める鍵であると結論づけることができる^{*5}。

しかし、かかわりの角度を変えるのは容易なことではない。タテの方向は主流・規範の色が濃く、親や教師がタテの関係にあるとされるのは、子どもを主流・規範へ引き上げようとする力が強いためである。角度をナナメに変えるためには、主流・規範から逸れた立ち位置に意図して属することができなければならない。指導力を意識的に下げ、何が起きても子どもの味方であるスタンスを崩さずに、子どもの考えを許容し受け入れ、その主体性を尊重することが求められる。その上で、完全に横並びではなく、子どもが道に迷わないように少し前で誘導する存在がナナメの関係と言えるだろう。つまり、大人が関係を規定する要因を理解しそれを自分で作り上げることができなければ、ナナメの関係の構築は困難である。

最後に、本稿の結論から得られる示唆を述べておきたい。近年、教育現場に対して、地域社会と協同し、学校内外で子どもが多くの人と接する機会を増やすことが推奨されている⁴⁾。しかし、ここまで述べてきたように、多様なキャリアであっても単に大人を増やすだけでは不十分であり、かかわりの角度を意識的に変化させ、タテの関係にある教師とは異なる角度で接することができる大人でなければ望む効果は期待できない。すなわち、ナナメの関係を意図して構築できる大人を増やすことが重要である。指導力を使い分け、ナナメの関係から接することができる大人の存在は、多様性や異なる個を許容・尊重し、それに十分対応しうる教育現場をつく

り出すことに大いに貢献するだろう。

謝辞

調査にご協力いただきました認定NPO法人カタリバ（アダチベース）、及びNPO法人キッズドアのスタッフの皆様、足立区くらしとしごとの相談センター職員の皆様に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

付記

本稿は、宗形義貴による同論題の帝京科学大学卒業論文（未刊行，2022年）を一部抜粋し、加筆修正したものである。

【注】

1. 精神科医の笠原嘉は、著書『青年期－精神病理学から』（中公新書，1977年）において、上下のタテ軸的価値観が破綻する中で青年と治療的關係を結ぶ方法は、父－息子という直系的關係に対する叔父－甥的關係、すなわち「斜め的關係」であると述べた。また、笠原は、この斜め的關係を成立させるためには一定の年齢差が必要であり、同年配者の友人關係は、治療的關係にはなりにくいと述べている。同書には、同年配者との關係に対する「ヨコの關係」という表現は使われていない。
2. 幼児は徐々に養育者のもとを離れて周囲の環境を探索するようになるが、安全安心が脅かされたときには愛着の対象である養育者との近接を維持することにより自分が「安全であるという感覚」を確保しようとする。すなわち、愛着の対象は子どもにとっての活動の拠点であり、「安全基地 (secure base)」なのである。(参考：『感情と思考の科学事典』pp.44-45, 1-4-5「愛着」)
3. 本章は、宗形論文（未刊行，2022年）の3章に加筆修正を施しまとめ直したものである。宗形は、アダチベースにおける調査は自筆のメモをもとに、キッズドアにおける調査は録音（事前承諾有）を書き起こして草稿を作成し、各々の施設に確認を依頼している。
4. 図2、図3は子どもの選択肢の幅を可視化するためのイメージである。子どもに対して「タテの關係（親や先生など）」「ヨコの關係（同世代の友人）」を示した図1に奥行きを加えて三次元化し、子どもの選択肢の幅を円錐形の底面積として示した。

5. 本稿の考察により得られた示唆は、ナナメの関係が支援者の属性によって一律に規定されるものではなく、子どもとの関係性において意図的・無意図的に変わりうる変数だということである。この変数を規定する要因を精査することにより、支援のありように関してより分析的な議論が可能になると考えられるが、この点は稿を改めて論じたい。

引用文献・資料

1. 藤原和博：公教育の未来，ベネッセコーポレーション，2005. ほかを参照のこと。
2. 「テレビ寺子屋 第2143回 藤原和博さん」(2019年8月18日放送)
https://www.sut-tv.com/show/terakoya/backnumber/post_516/ (2022.3.17閲覧)
3. 「NPOカタリバとは」
<https://www.katariba.or.jp/about/> (2022.3.17閲覧)
4. 文部科学省：「いじめを早期に発見し，適切に対応できる体制づくり」，ぬくもりのある学校・地域社会をめざして子どもを守り育てる体制づくりのための有識者会議まとめ（第1次），2007.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/040/toushin/07030123/002.htm (2022.3.17閲覧)

参考文献

- 荻野亮吾：認定NPO法人カタリバが運営するアダチベースの取り組み：足立区における子どもの貧困対策としての「居場所を兼ねた学習支援」事業（総力特集 社会的セーフティネットワークの構築：地域共生社会の創造に向けて），社会教育74(5)，34-39，2019.
- 神谷純子，江田慧子：子どもの貧困対策における大学の役割：地域連携事業「夢の体験教室」を事例とした試論，関係性の教育学20(1)，53-63，2021.